しろくろ

ユーナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しろくろ

【Ｎコード】
Ｎ３８２２Ｎ

【作者名】
ユーナ

【あらすじ】
色のある世界の少女と、色のない世界の少年のお話

（前書き）

この小説は２ｃｈで掲載された、新ジャンル『しろくろ』の設定逆転ストーリーです。

よろしければ、新ジャンルまとめサイトなどで元となった話を読んでください。

ある日、不思議な女の子に出会った。

整った顔立ちに黒くて長い髪、そして透き通るような白い肌。

ある日、不思議な女の子に出会った。

どうやら転校生のようだ。

白と黒の少しデザインの違う制服を着ていた。

ある日、不思議な女の子に出会った。

昼休みにもなると周りを囲んでいたクラスメートもいなくなった。

静かに本を読んでいた。僕が読みそうにもない黒い背表紙の分厚い本を。

ＨＲが終わりほとんどの生徒が部活の準備をする中、僕は帰りの支度をする。

暗くなってしまうと厄介だからだ。

昇降口につきため息をつく、どうやら今日は雨だったらしい。
頭の上の曇天に冷たい雨音、そして薄暗い道。
今日はついてないな、そんなことを考える。

「どうかしたの？」
後ろから声がした。
振り返るとそこには女の子。
声と輪郭から転校生だと判断する。
「いや、傘を忘れてな。どうやって帰るか考えてたとこだ」
「そう、家はどこ？」
「総合病院前だ、てかそれって俺が聞く事じゃないのか？」
「あはは、少しでも早くクラスに慣れたいからね。そのためには自分から動かないと」
うれしそうに笑う転校生
「さすがだな・・・。あれ、そういえば喋ってもないのにどうして同じクラスってわかったんだ？」
今日一日で喋ったのは休み時間にトランプをやっていたクラスメー

トだけだ。

「だから言ったでしょ？自分から動かないとって」

「は？」

「先生に名簿を見せてもらったの、それで顔だけは覚えたんだ」

何でもなさそうに言う転校生。

「ほんとに良くやったよ・・・」

若干あきれる。

「あ、そんなことより帰りどうするの？」

「ん、そういえばそうだったな」

完全に忘れていた。

「どうすっかな？せめてバス停までは行きたいけど」

けどバス停は大体二百メートル先だ。

しかも結構暗くなってきている。辿り着くのは難しいだろう。

「なぁ、バス停まで連れてってくれないか？」

「え？」

「いや、俺って暗いのダメなんだ」

「あら、以外」

「うるせぇ、こればっかりはどうにもならないんだよ」

せめて懐中電灯さえ持ってればな・・・

「頼む、今度なんかおごるから！」

土下座まではいかないが、両手を合わせ神社とかでやるアレっぽくやる

そんな俺を見て転校生はバカにしたように俺を見下し（実際は俺のほうが背が高いが）

「あんたにプライドってのはないの？」

「ごもっともです・・・」

だが、あいにく

「しかし、プライドで腹が膨れるとでも思ってるのか？」

「関係ないでしょ！？」

怒られました

「おねげぇしやす～～、後生ですから～」

「ちょ、気持ち悪い！」

「ぐぇっ」

殴るなよ！

「はぁ、わかったわよ」

「ほんとか！？」

「ほら、さっさと行くわよ」

急かすように手を握られる。

こうしてやっとバス停に向かった。

握られた手が、いつもより暖かかった。

バス停までの道、暗所恐怖症の俺は彼女に「ゆっくり歩いてくれ」と頼み、今はお婆ちゃんぐらいのスピードで歩いている。

「ねぇ、この辺に大きいお店ってある？」

「大きい？」

「そ、デパートみたいなの」

「おお、それなら総合病院の近くあるぞ」

「総合病院ってあんたの家の近くの？」

「おう、家から歩いてすぐだな」

「へぇ」

そうして少し考える素振りを見せた後、

「じゃあ、明日案内して」

「え？」

「明日は学校休みでしょ、だから案内してよ」

「まぁ、いいけど・・・」

「よし、決定！」

子供のようにはしゃぐ彼女。

そういえば高校生って大人なのか？

「じゃあ明日の十時に総合病院前のバス停に集合、遅れたらお昼奢りね」

「・・・おう」

明日はいつもより多めの金を持ってくかな

「あ、バス停が見えてきたよ」

「え、あ、ああ・・・」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

全く気がつかなかった。

だが、よく見るとバス停の看板の形がわかる。

「じゃあ、ここでいいや」

「大丈夫？」

「いや、さすがにここまで来ればな」

「そう、じゃあまた明日ね」

「おう、手繋いでてくれてありがとな」

「え？」

どうやら気がついてなかったようだ。

握ってる手が熱くなってくのがわかる。

「じゃ、じゃあね！」

走って去っていってしまった

それと同時にバスのライトが俺を照らした。

翌日午前十時十分――――

「お昼奢りね？」

「はい・・・」

例の如く遅刻しました。

「さ、それより早く行こう！」

「そうだな」

俺にとってはそれどころじゃないんだけどな。

というわけでやってきましたデパート。

いや、ショッピングモール？

「でっか」

「ね？」

「うわ・・・すごいね。広い」

「大概なんでもあるよ。二階にゲーセンもあるし」

「ふぅん・・・」

ゲームセンターに対して、興味がないのか。

俺の話に興味がないのか。

前者だった。

「うろうろしていい？」

「どうぞ。俺も適当に・・・」

「一緒に来てよ。広すぎだもん」

「・・・」

わかりましたよ、お嬢様・・・

「すっごいなー」

「こういう所ってなかったの？」

「うん。田舎だったし」

「へぇ」

「もっとこう、自然がいっぱいだったんだ」

「あ、なんだか楽しそうだね」

「そーでもなかったよ」

「そっか」

そんななんでもない会話を楽しんだ。

昼食タイム

「スペシャルセットを二つお願いします」

フードコートのファミレスに入り席に着いた途端に人の分まで勝手にオーダー

せめて選ばせろよ・・・

「なんで俺のまで勝手に選んだんだよ」

「どうせなら同じものを食べたいじゃない」

「金出すのは俺だぞ？」

「遅刻したからね」

ぐっ・・・

「だが、学生の身で千二百円×2は辛いぞ・・・」

「いいじゃん、デートをしてあげてるんだから」

「あ、そう」

「うわ、なにその微妙な反応・・・」

「ほら、来たぞ」

「あ、逸らした」

と、昼食での1コマ

午後の部

「わっ、ペットショップ？」

「変わってるよな」

「わー・・・犬だ、犬」

「犬好きなの？」

「だって可愛いじゃん。ほーら」

ガラス越しに指で犬を誘ってる。

別にこの仕草を可愛いって思うのは可笑しくないよね・・・？

「わん。わんわーん」

「・・・ぷっ」

「ん？」

「あ、ごめん。いや・・・面白い人だなぁって」

「そう？　」

「ほら、犬しっぽ振ってるよ？」

「！」

小さなチワワがバカみたいな可愛い顔で興奮してた。

小型犬もいいな。うちにいる犬にも見習ってほしいかも。

そんな楽しい時間もあっという間に過ぎ、気がついたら夕方になっていた。

「今、何時だ？」

「時間？　えっと・・・5時よ」

「・・・そろそろ暗くなるかな」

「どうだろ。何？　男なのに門限とか？」

「一人暮らしだ、アホ」
「アホとは何よ、アホとは」
「それより理由だろ？」
「あ、そうだった」
数秒前の話だろ・・・
「目、悪くてな」
「そうなの？」
「暗いと、道がよく見えないんだよな」
「眼鏡？」
「いや、コンタクト」
「そっか。あたしもだよ」
「あ、そうなんだ」
と、簡単に流す。
「理由はこんなもんでいいか？」
「まぁ、いいわ。お昼ごはんを奢ってくれたし、本も買ってくれたからね」

手に持った紙袋を見る。

「教室でもさ、本読んでたよね」

「うん、これ。知ってる？」

「・・・知らないや。ごめん？」

「どんな本が好き？」

はい、漫画です。

小説なんて、感想文を書くときなんかにしか読んだことありません。

・・・なんて言えばひかれるよな。でも事実だし・・・

「あんまり本は読まないね」

「そっかー」

「漫画とかなら・・・」

「あ、うんうん。漫画も読むよ？どんなの？」

彼女の指す「本」ってのは、なにも小説だけじゃなかった。

俺の思っている読書は、あながち間違いじゃあないらしい。

「漫画は結構知ってるんだね」

「兄貴の影響だよ。お前もなかなか」

「・・・本は面白いから」

「？」

「うちにも姉がいるんだ。ふふっ、えいきょーかな？」

「どうだろうね」

楽しい。

滅多に女の子と話すことなんてなかったけど、なんだか楽しい。

適当にだべっているこの時間が今日一日で一番の思い出になりそうだ。

帰り道

「思ったんだけど、どうしてあたしのこと“おまえ”って呼ぶの？」

「じゃあ逆に聞くが、なんて呼んでほしい？」

「えと、香穂」

「呼び捨てでいいのか？」

「ん～、なんかあんたにならいいかなって」

「なら、俺のことも智樹って呼んでくれ」

「りょーかい」

二人ともニコニコと笑っていた。

一目惚れ

そんな言葉を聞いたことがある。

週明けの月曜日も次の日もまたその次の日も――――

あたしは彼の後ろ姿を見ていた。

何度か話しているうちに、黒板の字が見えにくい時があるって言われた。

あたしがわかり易いようにノートをとるようになったのもそのあとから・・・

いろいろ変わった。

彼に出会ってから、あたしはいろいろ変わったんだ。

・・・一番変わったことがある。

それは、初めは勘違いであって、でも、それ以外のなんでもないって・・・

あたしは、彼が好きになった。

美術の授業

「風景画か・・・」

「どうしたの？」

「いや、まぁ・・・」

絵はちょっとな・・・

「あ、あのさ・・・」

「ん？」

「一緒に描かない？」

「え？」

「あたし、絵は結構自信あるんだ」

「そうなのか？」

ホントは行きたくないんだけどな・・・しょうがないか・・・

「じゃあ、向こう行こうぜ」

「うん！」

「あれ、智樹って色エンピツ持ってないの？」

「ん？ああ」

「なんで？」

「いや、そう言われてもな・・・」

「もしかして・・・」

「なんだよ」

「お金持ってない？」

鉛筆が折れそうになった。

「なんでだよ！？」

「だって、一人暮らしの高校生だよ？」

「毎月親から振り込まれるわ！」

「けど、食費とか」

「どんだけ大食漢なんだよ！」

「じゃあ、なんでよ？」

しつこく聞いてくる香穂。

でも、知られてはいけない。

最低限の人にしか話してないからな・・・

と、そんな時校舎側から先生が歩いてくる。

「あれ、先生どうしたんだろ？」

「さぁな」

どうせ俺だろう。

「おい、伊藤」

伊藤は俺の名字だ。

「なんすか？」

「お前、大丈夫なのか？」

「いえ、いつも通りっす」

「そうか、なら手伝いを頼む」

「あ～、今日は勘弁してくれません？」

「どうした？」

「いえ、新庄さんが絵の描き方を教えてくれるって言うんで・・・」

「ふむ、その様子だと新庄も心許せる友達ができたというわけだな？」

急に振られる香穂。

「え？あ、まぁ・・・」

「よし、じゃあ伊藤を頼む」

「あ、はい」

「こいつは絵が苦手でな、どうやれば描けるのか考えるのが大変なんだ」

「う、申し訳ないです・・・」

「謝るな、それを考えるのも教師の仕事なんだ」

いい先生に巡り合えたな、俺。

「じゃあ、他の生徒が昼寝してないか見に行ってくる。新庄に迷惑かけんなよ？」

そう言って先生は俺たちに背を向けた。

「わかってますよ」

「そうだ、人がいないからって襲うなよ？」

ニヤリと笑い振りかえる先生。

「するかっ！」

その反応に満足したのか、先生は笑いながらまたどっかに行ってしまった。

「ったく、あの先生は・・・」

「ねぇ、いつも通りの手伝いって何？」

「なんでもいいだろ？」

「あなた、スケッチの時はいつもそうなの？」

「ああ」

残念ながらな・・・

「どうして？」

「言わなきゃダメか？」

「お願い、少しでも智樹のことが知りたいの」

ぎゅっと手が握られる。

さすがに無理か・・・

「わかった、その代わりに絶対誰にも言うなよ?」

あきらめ、苦笑する。

「わかったわ」

香穂は自分なりに思うところがあるのか、じっと地面を見ている。

心臓が今までないぐらい脈を打っている。

まっすぐ顔が見れない。地面とにらめっこしか、できない・・・

「・・・」

「・・・」

「・・・こっち・・・・向いて」

すぐに反応した。

そこに・・・苦笑はなかった。

真っ黒な瞳は、あたしをしっかりと見つめてくれていた。

「俺の目、見える？」

「・・・うん」

「何色？」

「黒・・・綺麗な黒だよ」

「・・そっか・・・」

「・・・・」

拳一つ分、彼は顔を寄せてきた。

あたしがどきっとする前に、智樹は言葉を続けた。

「・・・俺の顔・・・見える？」

「・・・見える・・・・」

「何色？」

「色？・・・・肌色」

「瞳は黒で、顔は肌色？」

「・・・・」

「・・・じゃあ、ここは？」

すっ・・・と、あたしの手を、智樹は唇に寄せた。

湿った温度と・・・手の温もりが伝わってきた。

「・・・桃色・・・綺麗な、ピンクよ」

「・・・」

「でも俺には、全部しろくろでしか見えないんだ」

「・・・え？」

「・・・」

うっすらと、智樹は笑った。

「俺の目はな？色がわからないんだ」

「色・・・が？」

「お前の顔。まるで漫画のようにしかわからない」

「・・・」

「かわいい子犬？俺には黒にしか見えなかった。綺麗な風景？それも・・・わからない」

「・・・あ」

彼女には知られたくなかった。

いや、彼女だけじゃない。

クラスメートなんか特にそうだ。あいつらは必要以上に俺に気を使うだろう。

「・・・あ」

彼女は呆然としている。

それはそうだ、普段親しく接していた友達に「実は、君の顔がわからない」と言われてるんだ、誰だってビックリするだろう。

「悪いな、急にこんなこと言って」

「あ・・・」

「生まれつきなんだ、生まれてから一度も『色』を見たことがないんだ」

空気が怖くなり立ち上がる。

「これが、俺が絵を描く事の出来ない理由、夜が苦手な理由」

香穂に背を向ける。

「じゃあ、俺は先生の手伝いをしてくるわ」

そう言って立ち去ろうとした時。

フワッ――――

と、優しく包まれた

「どうして・・・」

「え？」

「どうしてそんな大切なこと言わないのよ・・・」

「ごめん、さっき言ったように生まれつき見えなかったんだ、だから俺は色がなくてもそれでよかったんだ」

「よかったって・・・」

「俺にとってはシロとクロの世界が当り前だったんだ、だからそんなことで他人に迷惑をかけるわけにはいかないんだ」

ただでさえ親に迷惑かけてんだ。

「なによ・・・」

「え？」

「なにが迷惑よ！」

彼女は泣いていた。

「あんたが他人に迷惑がかかるとか言って、勝手に一人で生きて、周りの人に心配させてるほうがよっぽど迷惑よ！！」

「なっ・・・」

「あんたは一度も人に助けてほしいって思ったことがないの？一人じゃ寂しいって思ったことないの？」

「そ、それは・・・」

何度かある、人とは違うシロとクロのモノクロの世界で一人で生きていることを辛いと思ったこが・・・

「あるでしょ？だったら頼ってよ、一人で抱え込んでないで」

「あ・・・」

こんなに頑張っていたのに、今まで築き上げてきたものが一瞬にして壊れてしまいそうだった。

「あたしが話を聞いてあげるから・・・」

シロとクロの世界が歪む。

「あたしがノートを見せてあげるから」

右頬に一筋の線ができる

「あたしが、あんたの色になるから・・・っ！」

次の瞬間、俺は香穂に抱きついて泣いていた。

今までため込んでいたのをすべて吐き出すかのように・・・

そんな俺を、香穂はただただ優しく抱きしめていてくれた・・・

しろくろ。

もうあなたに、たった二色の世界なんて与えない。

これからは、あたしが一緒だ。

ほんとは・・・

変わった人じゃなかった。

ただの、普通の男の子。

あたしの一生愛すべき、たった一人の愛しい人――――

（後書き）

香穂の本フラグを回収していない件について

これは最近投稿がおろそかになっていたために、焦って書いた話です。

原作者の方、すいません。本当に申し訳ないです・・・っ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3822n/

しろくろ

2010年10月9日10時16分発行